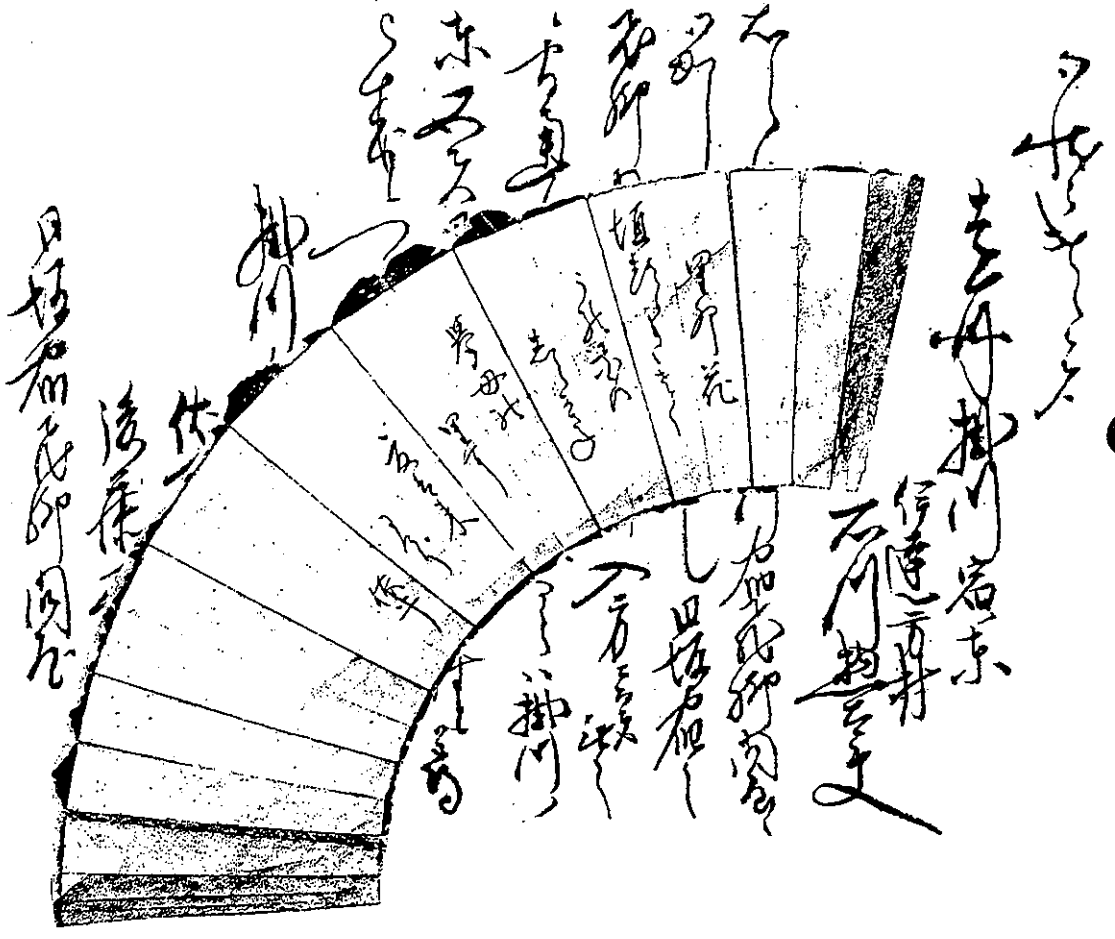


村上忠順翁顕彰会報



目次

あいさつ

○柴田顕光の和歌	1 ページ
○村上忠順をめぐる人々	3 ページ
○史談会速記録 (つづき)	5 ページ
○歴史探訪記	6 ページ
○表紙のことば	8 ページ
○三河乃奈具左	9 ページ
○編集後記	9 ページ

村上忠順翁顕彰会報

第13号

編集 村上忠順翁顕彰会

事務局

発行 平成14年3月1日



平成十四年度総会によせて

豊田市長 鈴木公平

村上忠順翁顕彰会の皆様には、第十四回目の定例総会を開催されるにあたり、心からお祝い申しあげます。また、発足以来、数々の研究成果を世に出して地域文化の高揚にご貢献いただいていることに対し、深く敬意を表します。

村上忠順翁が生涯を過ごした時代は江戸末期から明治初期で、急激に社会が変化し、新しい価値観が順次入植し、伝統的な価値が入り交った節目の時期でした。忠順翁は見失ってはならない人倫の道と、その時代に即した価値判断を適切に実行した人であります。

忠順翁の生きた十九世紀から二十一世紀へと移っても、人の道を常に問い直す姿勢・学ぶことの大切、間に習熟しても初心忘れず、の精神等は翁の大切な教えであり、現在の社会でも通用する教訓です。

没後百二十年近くを過ぎてなお、ふるさとの誇る偉大なる先人に対し、人々の追慕の念が絶えないことに、忠順翁の人徳の気高さを改めて知る思いであります。

私たちの郷土にとってかけがえのない偉人である翁の教えを尊び、ますます村上忠順翁顕彰会が発展されま



繋ぐ

村上忠順翁顕彰会会長 石川隆之

風薫るさわやかな季節を迎えました。

会員の皆様には益々ご壮健のこととお慶び申し上げます。本年度も顕彰会の事業は多くの方々の参加をいただき充実した運営ができました。心からお礼と感謝を申し上げます。

私は今年二月、江戸時代に天領といわれていた大分県日田市を視察しましたその折に民芸の里である小鹿田焼の地を訪ねました。ここで黒木組合長さんのお話を聞くことができました。

窯元は創業以来、ほとんど変らず十軒で、親から子へ、子は親から「技」を習得し腕を研ぎあを継ぐことが代々の仕来りであり、個人の名を残すのでなく「小鹿田焼」の名を残して、伝統の技を繋いできた「根の器」に昔を崩さぬ様」の考え方を固く守ってきたと話されました。素朴で人の温もりが伝わるような生活の器、んな焼物の生れる里である。民芸の心に出合い至福の「とき」をすごしました。

地元では、六鹿郎が今年度地震対策を含め大改修工事がおこなわれます。終了後は新しい仕組みで管理され運営はボランティア組織に任せられ利用は無料で開放されます。よって私たちの学習の場、市民活動の場が広がり新しいコミュニティづくりが始まります。同時に六鹿郎は文化財として大事に守りつづけたと思います。

顕彰会事業も新しい時代にマッチした活動を目指しながら、楽しさを持ち合わせた会でありたいと思います。終りに会員の皆さまのご多幸とご発展をお祈りいたします。



柴田 顕光 の 和歌

築 瀬 一 雄

て、十数首を抄出し、鑑賞と批評を加えてみることにしたい。

松竹増春色

九重の御垣の松もかは竹もひとへにしるき春のいろ哉

これは春の到来をことごとくという

設定から、宮中の景を思いやつて、実況として見ているように詠ったものである。「かは竹」は一般の川竹ではなくて、清涼殿の東庭にある竹を指す。また「ひとへに」は副詞で、下の「しるき」(著しい意)という形容詞を強調して、題の「春色を増す」という指定を具象化したのである。

今日から見ると、言葉だけで説明したに過ぎないとする人があるかも知れないが、そういつてばかりいるのは正しくない。幕末維新の社会情勢は、このように詠うのをよしとしたのであるし、その基盤を認めた上で、この詠い振りを眺めると、いささかのゆるぎも無い折り目正しさに好感がもてるのである。この歌は『類題

三河歌集』に載るものである。

漁村梅

夕月よ梅さく浦の蟹小舟香をしるべにや漕ぎかへるらむ

梅の香を強調し、それをたたえる気持で、漁村の夕景色を描いたのである。実況を写生するというよりも、むしろ日本画に描かれた風光を和歌の形に詠ったものと、そうとる方が、作者にも、読者にも、その通りだと納得されるであろう。作歌を楽しむ人達の気持を無視すべきではないと考えて、鑑賞するからである。これも『類題三河歌集』の歌である。

風前萩

秋風の萩の葉わたるこゑはな夕ならでもかなしかるらむ

この歌も極めてまともなうたいきつてある。「など……らむ」という疑問的推測法で、わが心の淋しさを表現しているのである。そして、その疑問の根元には、秋の夕べの感傷といふ伝統的定石が置かれ、その条件には合致しないのといつて、自分の個の感動を詠ったのである。説明すると、如何にも知的操作に終始しているようだが、実はそう面倒な手順を踏んでいる訳ではない。古典作品の累積が基底にあつて、こうした詠法が近世ではかなりはやっていたのである。であるから、顕光は異端

者ではなく、尤もオーソドックスな詠風の一人なのである。この歌は『類題玉藻集』に載るものである。

河霧

すゝか川ひとせふたせと晴れわたるきりのゆくへに朝風ぞふく

この歌は『類題三河歌集』の中にあるものであつて、これは川霧を吹き払つて、視野を拡げてゆく朝の風光が、うまく描写されている。しかし、「河霧」という歌の題から見れば、この歌のポイントは末句にある。「朝風ぞふく」と、係り結び法で表現されている点から、それは明らかで、川の霧は、その流動で、風を詠うための素材であるという扱ひである。では、この作者はその点を考えなかつたのであろうか。いや、そうではない。実はこういう詠い振りになる理由があつたのである。同じ『類題三河歌集』に、千町の「すずか河ひとせ二瀬とくれそめて八十瀬にうかぶ月のかげかな」という歌が存在するのである。この先行する歌の表現に心引かれていた作者は、古典的技法の本歌取りの手法を用いて、上句にこの先行歌の表現を取り込み、時間帯を夕から朝に転じ、主題を月から風に移したのであつた。千町の歌の題は「河月」である。私は以上のように理解する訳であるが、更に、

念のため一言を顕光のために、いい添えておきたい。それは、顕光は「朝風」又は「河風」という題の歌として、これを詠んだのではないか。それを類題集の編集の時に、表現の「す、か川」「晴れわたる霧」の方に眼を引かれて、「河霧」の題の歌に入れたのかも知れないのである。類題歌集というものは、四季恋雉の順に題の配列を優先して、例歌を充当するという手順を取ることが多かったのである。

落葉脆

あらしにハちるべきものとちりにけむうすきもまじる庭のみもちば

理屈でいつているのではない。一夜吹き荒れた翌朝のわが家の庭を目にした時の感じとして、すらっと詠ったまでである。散り紅葉の色の濃淡を、綾錦のようななどと俗な表現をしないで、薄くれないのままで風に吹き散らされた姿に、いとしさを感じて、すっと詠ったのであろう。これはこれで認めるべきである。これも『類題三河歌集』の採った歌である。そして、『類題嵯峨野集』にも入っている。

池水鳥

池の面は芦の枯葉のちりしかでむれゐてうかぶ水鳥のかげ

これは秋の終りに近い、冬への移行期の微妙な変化を、見る目でとらえたように詠っている。こうした歌を見ると、全く机上で作り上げた題詠であっても、そのイメージの形成には、過去の体験がものをいっせいののだといわざるを得ないのである。末句の「水鳥のかげ」は影ではなく、姿ととるべきである。しかも、予期した芦の枯葉の反対措置の如くに見るのであるから、複数である。それを「数」にすると、「数」という語に重点が移ってしまうから、複数であることを暗黙の内に含ませた、この「かげ」の使用が最適であったことになる。些末のことにこだわる

ようだが、和歌のような短小な詩型に於ては、一語一語の荷負う重さが、無視できないことを、思わせられる一つの例である。この一首は架蔵の短冊である。短冊の裏書に、「三河人伊賀八幡神社祠官、篤胤門、大正二年七六歳没」とある。しかし、この「篤胤門」は「鉄胤門」と解すべきである。篤胤は天保十四年（一八四三）没だからである。

後朝恋

契りしは夢かうつ、かさだめよとかきてぞおくる今朝の玉づき
題詠の恋歌は、近世では、殆ど詠まねばならぬ数合せのためのものと

なり、マンネリズムに墜し切っている。そうした中で、少しでも特異性を見せようと努めてかかった作品であろう。後朝の文という伝統を、愛の確認の不安という形で、表現しようとしたのである。詠む作者も、こうした歌を作品として読む享受者も、云つてみれば今日の艶歌（演歌）の耳をくすぐる感覚に近い気持で対応したのであつたろう。仮定された愛の対象者の反応はどうあろうとも、こう表現する男の側に、読者が少しでも、フーン、なる程、うまいこといつているなあと、思ってくれば成功という訳である。

相思恋

たまあへばあひぬるものかすが
ごもの七ふをとにもにゆづりてぞ寝し

この歌は、相思相愛の仲を、有名な古典の歌を背景にして詠出したので、それを面白いと見るか、つまらぬとするかは、それぞれの立場で、ちがってくる。ただ古歌の取り扱い方が普通の本歌取りとはちがって、いわばパロディ風になっているところがあるので、少し解説を加えてみる。「すがごも」は管薦で、植物の菅（すげ）で編んだむしろである。これが古、朝廷への貢物とされたが、産地として著名な陸奥国宮城郡利府

（とふ）の地名から、「とふのすがごも」と称した。すると、この「とふ」を「十節編」、すなわちあみ目の数と解して、「陸奥のとふの菅薦なふに」は君を寝させてわれみふに寝む（袖中抄）と詠われるようになった。相愛の男女の愛情表現の具として、この語がしきりに用いられた。その中に近世末期の顕光の一首も位置するのである。そして「袖中抄」の名歌の中の「七ふ」を、即ち一人しか寝られない筈のせまいむしろをゆずり合つて、共寝をしたことだと、詠ったのである。こう詠われて、下品なバレ歌とはちがった、清々しきを感じさせるあたりが、和歌のよきであるといつてもよいし、この一首の味だと認めてもよいであらう。この歌は『類題玉藻集』にのせてある。

寄書祝

天さかるひなのはてまで君が代は文みる道もひらけてぞゆく
題の「書」と歌の「文」は同じで、書物を指している。寄物の歌は、指定されたものを用いて、更に指定された趣旨を表現するという、二重の制約で作らなければならないので、多くは硬直した作品になつてしまふ。この一首もその弊をまねがれない。この歌は『類題玉藻集』所載であるから、文久二年（一八六二）以

前の作にちがいない。すると幕末の国の内外に拡がる社会不安の最中であったろうに、平田学派に属する作者の観念的な尊王思想が、こうした作を作らせたものと考えざるを得ない。少しも祝うべき状況ではない時にでも、こうした形式的な祝賀を詠う和歌の一面は、まことに奇妙であると言わざるを得ない。やがて近代短歌によって、切り捨てられるのであるが、それまでなお三十数年を要したのであった。

忠順新室賀

曳きうつることしを千代のはじめにてさかえむやは松ぞしるべき

忠順の歌集を見ると、「書斎をつくりて」として、「おくふかく猶ふみわけむまなびやのあさ木の柱あざらなり」とも「詠んだ歌がある。『あさ木』は浅木で、建築用材がそまつであるという謙遜語で初句の学究の心の象徴の「ふかく」と対比させた表現である。又、忠順の『座右記』を見ると、安政四年（一八五七）八月六日には藩主が遠馬のついでということ、忠順宅へ立ち寄り、書斎までご覧に入れたという記事があるので、顕光が祝いの歌を詠んだのは、恐らくその少し前ぐらいであろうかと思われる。歌は新築記念に植えられた

松にことよせた寿がい歌となつてゐる。これも『類題玉藻集』に載るものである。そして、同じ集に羽田野敬雄も「村上忠順が新室賀に栽松といふ事を」として、「つくれりし家の千歳はいちじるしうゑにし庭の松の葉色に」の一首を載せてある。全く同類の作である。

敬雄五十賀

書みればうきをわするくさはひにやがて齢ものぶるなりけり
「くさはひ」は種で、物事のもとになるものを指す。敬雄は書物好きで、人々から図書を集めて、羽田文庫を創設した中心人物である。そうした彼の性向によって、五十歳に到した賀寿の歌として詠んだものである。『類題玉藻集』には他の人々の歌も載せてあるので、比較してみるのが面白いが、この稿では省略する。

完

村上忠順をめぐる人々―村上家篇―

中 澤 伸 弘

幕末の国学者や和歌歌壇を考へる上で、村上忠順は重要な位置をしめてゐる。これからの人々と忠順は密接な関係を有してゐた様だが、今回は村上家における忠順をめぐる人々について記しておかう。

三河の竹尾正久の編になる『類題三河歌集』は慶応二年に上梓されたが、これを眺めてみると村上一族の歌が目につく。忠順から六代前の真謙の歌が一首あり、ついで義忠、恭甫、恭臣と続き、祖父忠直、祖母貞女の歌がある。父忠幹、母美志子は勿論、妻三千代、兄眞武をはじめ、子供である年之子、小鈴子、忠圀、八千代、忠明、忠浄、妻世根、純の名が見え、それぞれ歌が記されてゐる。忠順を含めると村上一族は十九名にのぼる。この歌集は竹尾正久の編とはなつてゐるが、実際には正久の他中山繁樹、寺部宣光、公阿と村上忠順の五名が選んだと言ふので、この村上一族を採つたのは忠順の自

家一族に対する思ひからであつたと言へよう。父忠幹は嘉永六年に、母美志子は慶応元年に逝いてゐるので両親追慕の思ひもあつたであらうし、同慶応元年五月には次男忠明を二十二歳で亡くしてゐる。母を四月に亡くしたばかりで悲しみはなほ癒えることがなかった。

実は忠順は十九歳で兄眞武を亡くし、親となつてからは長男忠圀、次男忠明、四男純と三女八千代の四人に先立たれてゐる。國學者として名をなし、明治十七年、七十三歳まで生きた忠順ではあつたが、その心の中には子を思ふ父としての深い悲しみが存してゐたことと思はれる。三女八千代は忠明と同じく二十二歳で文久二年に逝いたが、長男忠圀は四歳、四男純は二歳でこの世を去つた。夭逝と言ふにはあまりにも気の毒なことである。

この『類題三河和歌集』には、こ

の四歳二歳で歿した忠順、純の歌が一首ずつ収められてゐるのである。

桜花咲の盛を見わたせば散ぬへしとはおもほえぬかな 忠順
春の野はふり捨てたかきけしき哉す、なに蝶のとまれかくまれ

純

前者は「盛花」と題し、後者の題は「春野」で、何れも春の歌である。この歌集にも当時の他の類題和歌集と同じく巻末に作者の姓名録があり、忠順、純の名があるが、純の所には「幼年」と記されてゐる。ただどう見ても、二歳や四歳で逝いた子供の歌ではない。年齢も数へ歳ゆゑ、嘉永三月四月に生まれ、翌年三月に歿した純は、現代の数へ方では一歳に満ちてをらず、到底和歌など詠める筈はない。いづれもこれは忠順の代作であらうし、それを読者は承知してゐたであらう。ただそこには一族を漏れなく載せようとしたと言ふよりも幼くして逝った子を偲ぶ父忠順の親心が感ぜられる。忠順は満開の桜の下で遊び、純は舞ひ飛ぶ蝶を指さした事もあつたらう。私には忠順のこの繊細な気持ちがこの上なく有難いのだ。さういふ人物であつたがゆゑに亡き母や子を偲ぶ歌集である『六華集』をまとめたのである。

『六華集』は忠順の編になる歌集で「八千代女詠草」「美志子詠藻」「忠明遺稿」「千濤百首」「三河三十六人撰」「千卷舎歌集」の六種類から成る。「千濤百首」は忠順の門人石川千濤の歌と追悼歌を載せたもので、「三河三十六人撰」はその千濤の撰。「千卷舎歌集」は忠順の書庫千卷舎の新築に際し、各地より寄せられた歌をまとめた歌集である。これ以外の前半の三種が忠順の深い悲しみを伝えるもので、「八千代女詠草」は三女八千代の歌集、「美志子詠藻」は母の歌集、そして「忠明遺稿」は名の通り次男の遺稿である。本書の刊年は定かではないが、美志子、忠明ともに慶応元年に逝いたので、その後まもなくの事であらうが、ここにも人の子で人の親であつた忠順の姿が見えるのである。

文久二年八千代が逝いた。これは忠順にとつては思ひがけない事であり、二十二歳といふ年に逝つたわが子への思ひは尽きないものであつた。「八千代女詠草」は、文箱の底に見出た八千代の歌五十一首が記されてゐるが中でも「九歳のとき手ならひに師のもとにゆく道にてこがねをひろひければ、落し人やあるとたづぬれどしれざりければ、つかさにくたふる」との長い詞書の歌があり、拾つた金を届けた八千代の真面目な姿が思ひ浮かぶものである。

ありしおもかげ目にうかびてなかなかにもおもひのたねになむありける。いとしもめでたからぬえせ歌もかたみとみればいといとなつかしう覚えて……とは、姉の年之子が寄せた序文である。「深見とし女」と署名してあるので既に文久二年には深見篤慶に嫁いでゐたのであらう。この巻末には追悼歌が十五首あり忠順は子を慕ふ長歌を寄せて、自らの深い嘆きを「かきさし、手習見れば こきうすき文字のかずかず 希の上に泪ぞおつる……其面かげのまなかひに もとなかりてなれが名の ますますなかゆ なれが名の八千代にもかとなおもひけむ」と表はしてゐる。そしてその反歌に

八千代とおもひしものを秋風のなにさそひけむあはれしら露と詠じてゐる。子を亡くした悲しみはなほも深かつたのである。

慶応元年四月には母美志子が七十七歳で逝いた。「美志子詠藻」には母の歌十四首を載せたあと、忠順の「柞の下露」と言ふ、母の看病の記が記されてゐる。母親の異変はおとしから始り、医者である忠順の努力によつて一度は快癒したもの、再び病床につくこととなつた。既に夫を亡くして十年余、周囲には世話する人々もあつたわけだが、寄る年波には勝てなかつた。

四月十八日ねむるが如くになくなりぬ。せめて八十まではとおもひしを御年七十七なるこそかなしけれ。世には喜寿とかいひて、ことほぐめるをさるわざをだにえせで不孝のつみおもへばおもへばくひの八千たびにて……

とは、忠順の柞の下露の一文だが、喜寿の願ひが叶はなかつた不孝を自ら責めてゐるのである。このあと、母を偲ぶ長短歌を二十首ほど記し、長歌の反歌には

いまよりはたれにかつけむうきにつけうれしきにつけかたりし

ものを

と詠んでゐる。ここには年老ゆとも仲睦まじい親子関係が見てとれるのである。斯様な忠順を育てたのは、この母親なのである。このあと三河を中心に全国から寄せられた追悼歌が五十三首続き、ついで忠順の子小鈴が祖母を偲ぶ跋文を記してゐる。

母が逝いて二ヶ月後、まだ涙の袖の乾かぬうちの閏五月、次男忠明が二十二歳で逝いた。長男忠園を天保十三年に亡くした忠順には、二年後の天保十五年に生まれた次男忠明が、その生まれ替りの様に思へ、村上家の継嗣として厚い期待をかけた事であらう。「忠明遺稿」の序文で成瀬広冬がその人柄を記し、幼き時より皇国まなびをはじめ、漢学の教養もあり、和歌、漢詩を作ったといふ。実際に忠明遺稿には和歌五十首余の他に漢詩も残されてゐる。また難波や吉野、京にも遊んだ事があり、やんごとなき人々とも交はったといふので、その交遊関係も盛んであったのだらう。期待したが為に忠順の悲しみは深かった筈である。

全国から追慕の歌が六十首ほど寄せられたが、これらは死を悼むとともに忠順の心をも慰めるものであった。悲しみのあまりに忠順は

さみたれの月もなみだもくは、
りてほすひまもなきわが涙かな

忠順

と詠じたが、その悲嘆はいまここに書けるものではない。時に忠順は五十四歳で、『類題玉藻集』の編輯出版をはじめ、古典の註釋などの著述にも精を出してゐた頃であつた。

忠順はこれらの悲しみを『六華集』にまとめる事で乗り越えたのである。人生には悲しみも喜びもあるものだ。長女年之子(愛子)は深見篤慶に嫁ぎ、行太郎春明、恭次郎篤恭富子、徳子といふ子を生んだ。二女小鈴は鈴木重愛に嫁ぎ節太郎、篤次郎、光三郎といふ子を生んだ。篤慶も重愛も忠順の門人であるが、忠順の門人帳には「深見行太郎 七才」や「鈴木節太郎」ほか二人の外孫の名が記されてゐる。村上家は三男の忠浄が継いだ。明治以降はこれらの外孫たちにも囲まれて、国学者としていよいよ輝かしい時代を迎へたのであつた。

忠順の生涯を思つた時、そこには暖かな家族の絆があつたのであり、忠順の家族愛を見落としてはならぬものだ。私はさういふ忠順に親しみを覚える(國學院大學講師)

史談会速記録(つづき)

第一四四輯

(明治三十七年十一月二十九日)

吉木竹次郎速記

明治三十七年七月三十日午後三時一同着席深見愛子君臨席
一村上忠順君維新前後国事勤勞の事蹟 ○大総督有栖川宮御東征に扈從せし顛末

父は勿論弟忠浄に於きましても其心などは毫末もなく、それに関係などは少しもありませぬでしたけれど、大和一舉の時に、義士を潜伏させた事も判つて居ります故に今度も亦有志を潜伏させているであらうといふ疑ひが上にあつて、それで四十名以上も捕方が参つたらしいのでございませう、其日の午后に遅く兩人に手錠をかけまして駕籠に乗せて額田縣に送られました、其時に私の妹婿鈴木保の家も鄰近にありまして家屋敷が廣うござりました故に、潜伏の疑があつたものか共に額田縣に捕れて行きましたが是は間もなく放免になりました、それから父と弟は日々糾問ありまして、十三日に忠浄は額田縣

で口書押印をいたしまして、同日午後京都府へ護送になりました、京都へ護送せられて見ますと同府に同事件のものが多人数拘留になつて居りました、忠浄が護送せらるゝ前に忠順は額田縣で取調べを受け京都へ送られ同所で種々調べられまして二日拘留になり事實取調の結果無罪にて額田縣に護送になりました直に放還せられました、忠順は京都から還り忠浄は京都へ送らるゝ其途中で駕籠がすり逢つた様な譯で京都に留め置かれて折々取調べがありました、何分忠浄は伊勢神宮移轉の企などには少しも関係はありませんでしたが、忠浄の親しき人々が幾らも関係いたして居りました故に其等の者が皆々補縛せられて判然するまで留め置かれましたさうでござります、忠浄は即明治五年三月廿日から翌六年の九月廿一日迄京都に留め置かれまして愈々関係の無い事が判りまして同日に謹慎三十日の申渡がありまして京都の親族に引渡しになりました

た、それから直に歸宅致しました、先回にも申し上げましたが所有の書物が澤山あるについて文庫を建て其文庫の事から父忠順の履歴様の事などを碑に刻り付けたら宜からうと云ふ事で深見篤慶即藤十が文庫並に碑を建てました、篆額は畏くも有栖川大將の宮より御染筆を賜りました其文は次の通りでございます、

(碑文は略す)

十七年の十一月初め頃より病氣になりまして、全月廿三日に七十三歳で死去致しました、有栖川宮様より玉串料を賜りました、其死去の四五日前迄机に懸つて種々書き物を致したりして居りました誠に記憶も宜しうござりました、自分の肖像を存世中に書かせまして夫に自ら題しました歌は

大丈夫のみかく心の白玉は
いてりとほらむ天地のむた
書にとみまものをしもの

あまたあれば
いさやつとめてもの學ひせむ
世のことはきかしもとめし
志めやかに

ひとり書みしるよもきふの庵
ことしあらは我身ひとつは
君の爲め

火にも水にもいらむと思ふ
明治十八年神道管長より少正を贈ら

れましたこれで先づ忠順の一段は済みましてでございます。(一同座禮)

完

付記 「史談会速記録」は本号をもつて終了しました。

忠順翁顕彰の一助になればと三回に亘り会報(第一号、第二号、第三号)に掲載しました。

この速記録の中で忠順の長女深見愛子が述べた内容は次のとおりです。

・ 忠順、忠明の事蹟

・ 忠順幼時の秀才勉学及医業を以つて土井家に召出さる、事

・ 常に研学を怠らず強氣にして著述草稿等を数多所蔵せる事

・ 佐幕論のみ多き刈谷藩中勤王党を興振せしめたるは忠順の偉功に依ること

・ 忠順専ら王事の爲め正義を唱え国家につくさんとの事

・ 勤皇佐幕党派の激発により家老三人斬殺せられし變の事

・ 忠順の孝道遠隔を往復して寸時も父の看護を怠らざる事

・ 忠順維新前後国事勤勞の事蹟

・ 大総督有栖川宮御東征に扈從せし顛末

右、今回の最終稿を機にご再読下されば幸に思います。

歴史探訪記

へ忠順の足跡をたずねて

第十三回を迎えた歴史探訪は、晩秋の十一月二十一日に実施された。

暦の上ではすでに立冬をすぎ小雪を迎え手紙には霜寒のみぎりなどと前文を置く季節となっていた、もし雨でも降れば寒い日になるだろうと心配もした。しかしこの日は幸いにも心配をよそに快晴となりその上小春日和となった。

今回の参加者は四十九名、バスは定席をこえ補助席まで使用する盛会の旅となった。

今回の歴史探訪の目的は村上家に保存されている資料の内遠江の国学者・歌人石川依平から忠順に宛てた数十通の手紙を手がかりに二人の関係を顕彰(明らかにする)することと合せてその周辺掛川の歴史を探訪することであった。

バスは東名高速道路を東へ約二時間走り掛川城大手門駐車場に着いたのは午前十時少し前であった。

晩秋の掛川城が目前に見えその姿が美しい。今日の講師岡本春一先生の出迎をうけここより徒歩で約五分の掛川市立図書館へ向い新築後間もない図書館の大きな研修室へ案内さ

れた。今日は遠来の客で会員でもある中澤伸弘(国学院大学講師)先生が東京から参加されここで合流した。図書館では正午まで約二時間の予定で岡本先生に講演をお願いした。



講演会

岡本先生は教職を退職され掛川市史編纂にたずさわる傍ら石川依平を研究され「国学者・歌人石川依平」を著し出版された。又当日奇遇なことがあった。それは焼失し現在造営中の前林町神社に古い棟札があるこれに記るされている「朝比奈良忠」を明らかにしようと調査された。この朝比奈の祖が遠江国ではないかと掛川まで足を運ばれた。そのとき調査に協力下さったのが岡本先生であった。尚この調査にあたり忠順が残した「三河雜抄」も手がかりの一つになったことを付記しておきたい。

そしてつづがない新社殿の造営と神社記発刊の成就をお祈りしたい。

さて講演の内容は石川家七代についてその家系と依平翁の生涯を話され我々会員は一語も洩らさじと聞き入った。講演は予定の正午を過ぎて終了した。(講演の概要は後述する) 昼食は図書館とお城に近い城下まちにある「割烹・服部」という老舗の二階で和食を賞味した。床の間のある畳の大広間に並べられたお善はいかにも和風らしく心がなごむひと時であった。

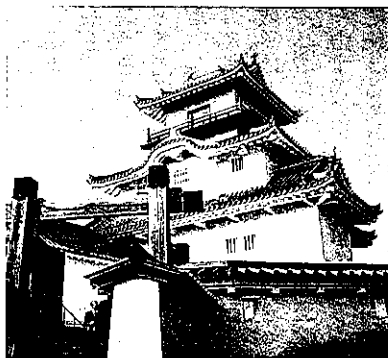


昼 食

食事のあとは全員で掛川城を見学した。掛川城の歴史は戦国時代の文明年間(一四六九〜八六)駿河守護大名今川義忠が遠江支配の拠点として重臣朝比奈泰熙に築かせたことに始まる。その後桶狭間の戦い(一五六〇)で今川義元が織田信長に倒さ

れると義元の子氏真は武田氏に駿河を追れ掛川城に立てこもった。これを家康が攻めて和睦により開城させ家康はこの城を武田侵攻の防御の拠点とした。

天正一八(一五九〇)年全国を平定した秀吉は家康を関東へ移し家康の領地には秀吉配下の大名を配置した。掛川城には山内一豊が入城し戦乱により傷んだ城の修復を行いこのとき初めて天守閣がつくられた。現在の掛川城は平成六年四月に三層四階の純木造の天守閣が復元され東海の名城といわれている。



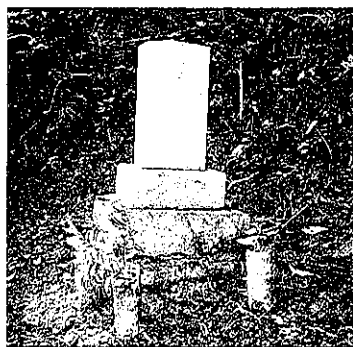
掛 川 城

さて、お城を見学した後は自由時間となり皆さんは三三五五に城下まち散策、買物、喫茶など楽しんだ。

午後二時を過ぎてバスは石川依平翁の墓地へ向った。墓地は掛川市の中心市街地をはずれた山のふもとに

あった。ここには石川家代々の墓石が並び苔むして墓標の文字さえ読みとれないものや傾いているものも見られた。依平翁の墓は入口に近いところにあった。

墓参りは当顕彰会で用意した花を供え会員はそれぞれ線香をたむけ合掌した。香煙が立ちこめるころ心ある会員の一人が勤行(読経)しめやかに翁の冥福を祈った。



石川依平翁墓

秋の陽は短い、足を早めて次の地へ向う十五分ほどで事任八幡宮に着き参拝と見学をした。

この神社の創建は古く成務天皇(一九〇)の御代といわれ桓武天皇(八〇七)の御代に現在の地に移されたという。祭神は己等乃麻知媛命・菅田別命他二神である。この神社には参拝のほか期待されるもう一つの目的があった。それは依平が六才のときこの神社へ奉納した歌の額

を見学することであった。この額のことは前もってお願ひしておいたので宮司が座敷へ出しておいで下さった。

額は板で作られた質素なものでこの板に直接墨で書かれていたが二〇〇年も昔のこととて文字を読みとることは出来なかったが神童といわれた依平が奉納した本来の歌は次のとおりであった。

君が代の松の千年を神つ幾のゆく末さかふ敷島のみち

宮司にお礼をのべ最後の見学地である東海道日坂宿へ全員徒歩で向う。

古歌に詠まれた中山峠を西へ下り掛川宿の手前が日坂の宿であるこの宿には本陣一、脇本陣一、旅籠三十三軒があったという。今はわずかに残る東海道に面して川坂屋一軒のみが市によって保存されている。

心地よい秋風を感じ街道を歩いて行くと「猿出没注意」の張り紙が目にとまった。遥か江戸時代の宿場のにぎわいに思を誘われる日坂の宿であった。日坂宿では掛川市教育委員長片岡計夫氏の出迎えをうけ説明を聞いた。片岡氏は地元日坂の人でボランティアで説明をしていると聞いた。

陽が西に傾き夕刻を迎えるころ今

日の日程は無事に終った。バスは再び掛川市内に入りお世話になった岡本先生と東京から参加された中澤先生は下車された、バスは掛川ICから帰路につき無事帰ることができた。

石川依平と村上忠順

ともに国学を究め和歌に精通した国学者・歌人でした。

依平は寛政三（一七九一）年正月元旦石川家七代目の嫡子として生れ幼名を亀蔵・為蔵のち方救のち改め依平・号を柳園・樞本といった。

忠順は文化九（一八一二）年の生れ依平より二十一歳年下でした。

依平は五歳のとき「うれしいな門の柳に手がとどく」と初めて歌らしきものを詠み翌年六歳のとき日坂八幡宮之歌の額を奉納しました。（事任八幡宮見学の項参照）

やがて依平の神童ぶりが城中に達し城中に呼び出されつぎの四題が出題された。依平は即座に詠んで差し出しました。

霜月夜

山のはの梢あらはにをく霜の影も消え行く冬の夜の月

浦千鳥

ゆきかへりしば鳴つれて

友千鳥声も高けれ須磨の浦波

野雪

空さむみ降りまさるらん白雪のつもりうつれる冬の夕ぐれ

友千鳥

風さそう音ぞさみしき夕ぐれに友よびつれて千鳥鳴くなり

依平は九歳のとき京にのぼり歌道の旧家冷泉中納言為泰卿の門人となり、十七歳のとき本居宣長著「玉霞」を読み深い感動を受け十八歳のとき国学者栗田土満の門に入りました。

入門の日土満はつぎの一首を詠み依平に示しました。

心あらばたずねてもとへ三輪の山すぎにし神の代々のふるごと

依平はつぎのように返しています。三輪の山杉たつ門も見えわかぬ霞の中のみちしるべせよ

土満が依平に与えた課題は「すぎにし神の代々のふるごと」でした。

ふるごとの中にこそ神国日本の教えを解く国学の基礎があると教えています。土満は元文二（一七三七）年に生れ賀茂真淵の門を叩き入門、真淵亡きあととは本居宣長の門人となり文化八（一八一二）年宣長は七十四歳で歿しました。師を亡くした依平は本居春庭（宣長の嫡子）に入門しました。

依平の門人録によれば、その数二

七八人、この内尾張二人、三河十三人の名が見え三河の中に「村上承卿・忠順・刈谷藩中・天保十四年・三十二歳」と記されています。

石川依平略年表

寛政三（一七九一） 一歳

七代目依平出生（為蔵・亀蔵）

八（一七九六） 六歳

日坂八幡宮へ歌の額を奉納

城内へ召され和歌を詠む

伊達方諏訪神社へ歌の額を奉納

九（一七九七） 七歳

有栖川姫宮御宿に召され歌二題を詠む

一一（一七九九） 九歳

歌道の旧家冷泉家に入門

享和三（一八〇三） 一三歳

「東海道人物誌」に歌人と掲載

文化五（一八〇八） 一八歳

国学者栗田土満に入門

六（一八〇九） 一九歳

伊勢参拝（往復一七日）

八（一八一二） 二二歳

栗田土満歿（七五歳）

一〇（一八一三） 二三歳

その・と結婚

国学者本居春庭に入門

文政一（一八一八） 二八歳

真淵五〇年祭発起人補助務める

文政七（一八二四） 三四歳

父隠居、依平家督を継ぐ

九（一八二六） 三六歳

妻その歿（三七歳）

一一（一八二八） 三八歳

本居春庭歿（六六歳）

天保二（一八三一） 四一歳

後妻いまを娶る

八（一八三七） 四七歳

四月父歿（七八歳）九月母歿

一四（一八四三） 五三歳

忠順依平の門に入る（三二歳）

嘉永四（一八五一） 六一歳

為蔵改め惣太夫を名乗る

六（一八五三） 六三歳

後妻いま一〇月歿（五一歳）

安政六（一八五九） 六九歳

九月四日依平歿

出典「国学者 人石川依平」

表紙のことば

里の卯の花

垣つゞき さくうの花の

しろかさね 挙母の里に

夏は来にけり 依平

扇面に挙母の里を詠んだ依平の和歌一首が豊田市内にありました。

依平は挙母へ来たようです。のかな挙母の里が浮びます。年代不詳

三河乃奈具左

築瀬 一雄



豊橋へ通勤したことが二度ある。

そのはじめは、愛知大学に文学部の国文科が出来た時で、非常勤の講師として、毎週一回ずつ、二年ほど通った。その頃、安城に住んでいたので、東海道の普通列車から眺める三河湾の展望は楽しかったし、講義のすんだ後、市内の古本屋と古道具屋めぐりは、資料集めのはげみになった。

ある日、上伝馬町の白文堂で、一冊の画帖を見付けた。美濃紙を八十枚ほど袋綴じにして、厚手の紙を表紙にした疎末なものであった。俳句が主で、歌と画が少々まざっている。白紙のま、が半分以上ある。題簽も無い、三枚の装書印も無い。しかし、中に高皇武尊の歌がある。当時、

式部の全歌集の編集に当たっていたので、この一首が役に立てばよいと思つて購入した。この歌は、他の資料には見えないものであったから、高皇武部全歌集(昭和三十三年十月刊、私家版)の最後の式部歌集補遺に加えることが出来て、本当によかった。

白文堂の主人に聞いても、この本は岡崎の好事家がお亡くなりになつて出たものですただけ云う。その好事家なる者が誰かは聞くべきではないと思つたし、それが単なる旧藏者であるに過ぎないか、この画帖のはじめからの所有者の子孫であるかも知れない。しかし、いつまでも無題のま、にしておく手はあるまいと思つて、いろいろ考えた末に、三河乃奈具左と名付けることにした。私は俳諧には素人であるけれども、こゝに名が見えるものほとんどは、三河人であるらしいし、前にあげた式部は伊勢出身の京住であるけれども、吉田(今の豊橋)まで旅をしたことが判っている、岡崎の辺りを通つた筈である。

さて、俳句や和歌や画が、一体い

つ書かれたものか。中に「十三才ゆ比め」と「八十翁西湖」というのがある。この二人の伝記が判ればよいが、まだ調べが属かない。この外にはつきりしているのは、画に「丙子仲秋写文山」というのがある。この丙子は明治九年(一八七六)であろう。そして、この画帖の執筆の下限を、この辺りと見ることが出来る。

幕末から明治の冒頭に亘る三河地区の文雅の営みであつた一冊の画帖に、新しく名を付けた私は、すぐに刈谷の荒木柊花さんに、題箋の染筆を頼んだ。いただいた題箋を表紙の左上に貼つた。書は上乘である。題簽の新しさが気になるが、これは休むを得ない。今年の夏は、少し日に曝すことにしよう。やがて、しつくりと表紙の時代に馴染むことである。

私は念のために、国書総目録で、同じ書名の無いことを確認した。これからは、これを使用する時には、三河乃奈具左(碧沖洞藏)とする。早速であるが、今手掛けている村上忠順とその周辺に、ここから三首の和歌を引くことにする。忠順の娘と婿と息子である。それを次に書き出して、この稿を閉じることとする。

樹陰泉 登之野女

松かけの岩間をつたふき、れ水なつをもしらぬ夕風そふく

月下砧 篤慶

つきかけの清き軒はにをとめらか手たまもゆたにころもうつなり

恋のうたの中に忠浄父は、のいさめをまもる人たにもまよふは恋のやみち也けり

(二〇〇一・五・三一)

編集後記

前号の会報は築瀬先生のご好意により西三河の著名な歌人岡崎市伊賀町の旧家(代々八幡宮に奉仕)九代一柴田千町の和歌を紹介した。今号も続いて同家十一代顕光の和歌に解説と批評を付けて掲載させて頂いた。三河歌人を知る上で貴重であり、自己学習にも有難いものである。

さて、今回は東京にお住いの忠順研究家中澤伸弘先生(当会会員)より忠順の顕彰に相応しい原稿を頂いた感謝し紹介させて頂いた。

文字ばかりで顔の見えなかった築瀬先生に写真を無心。頂いた随筆とともに元気な先生を紹介しました。

昨年を表す漢字は「癒」。今年は早々にTVドラマで利家の妻まつは「私にお任せ下さい」といった今年は「励」を望みたい。事務局記

依平から忠順への手紙考

この手紙は、依平がその名・通称為藏を惣太夫と改名したことを忠順に知らせるものである。この手紙に日付はない。年表によれば改名は嘉永四（1851）年とある。

※このとき依平61歳・忠順40歳であった。

（手紙の縮尺＝原本の二分の一・コピー） 原本は村上家蔵

拙子依平より
 まは國佐野郡伊達方村
 石川惣太夫
 為藏と稱し候所
 近年改名いたし候
 御状被遣候二は
 遠州掛川宿ノ東
 伊達方村
 石川惣太夫
 右之如御しるし掛川宿飛脚問屋へ
 御出し被成候へ八届申候日坂宿之
 飛脚問屋二而もよろし八方二而は無之
 候間通りなどの後便ならハ掛川ノ
 東又は日坂ノ西二て伊達方村と御尋
 被成候へハよくわかり申候
 掛川宿飛脚問屋
 伏見屋次左衛門
 後藤善衛門
 日坂宿飛脚問屋
 江戸屋善左衛門
 いづれ二而もよろし

対訳

（解説 愛知大学田崎教授）

拙子處書之事

遠江国佐野郡伊達方村

石川惣太夫

通称為藏と称し候所

近年改名いたし候

御状被遣候二は

遠州掛川宿ノ東

伊達方村

石川惣太夫

右之如御しるし掛川宿飛脚問屋へ

御出し被成候へ八届申候日坂宿之

飛脚問屋二而もよろし八方二而は無之

候間通りなどの後便ならハ掛川ノ

東又は日坂ノ西二て伊達方村と御尋

被成候へハよくわかり申候

掛川宿飛脚問屋

伏見屋次左衛門

後藤善衛門

日坂宿飛脚問屋

江戸屋善左衛門

いづれ二而もよろし